

自然に和んだ空間を
生み出す暖炉の炎

年に何度となく渡英する私は、昨年のクリスマス期には、バース郊外のユニークなB&R(民宿)に滞在しました。そこは一〇〇年もの間、水車小屋として使われていた建物で、五年前から持ち主がB&Rを開業したのですが、床下を川が流れるなど、建物のあちこちに、歴史の重みを感じるような風格のある宿でした。

私が訪れた日、宿の息子さんたちは別のところで過ごしていたので、奥さま一人で私たちのほかに二組の客の相手をしていました。内訳はオランダからやってきた夫婦と、スコットランドから来た夫婦でした。

ご存知のとおり、イギリスのクリスマスでは、親しい家族が集まってクリスマスマンランチやティナー

豊かな英国式暮らしに 欠かせない暖炉の魅力

井形 慶子 *Written by Keiko Igata*

とります。子どもたちがいる家庭では、暖炉があるリビングルームに集まって、その年のプレゼントを開けるのです。

その日に初めて会った私たち六人は、夕方六時ごろから奥様が振る舞ってくださったティナーをいただきました。昨日まで知らなかった人たちが食卓を囲むのですから、最初は多少遠慮や居心地の悪さもありました。

ところが食事が終わり、二階に上がって、天井の低いリビングルームでお茶やお酒を楽しむうち、自然に和んできたのです。その功労者は、その部屋の古い暖炉でした。話によると、この暖炉は、この建物が建った一〇〇年前に作り付けて作られたものでした。

イギリスの家では、リビングルームに暖炉がある場合がほとんどです。家を建てる時も煙突も含め、暖炉は作り付けて作られることが多いのです。

私たちは、部屋の真ん中に置いてあったソファに座りながら談笑を続けました。国が違っても、仕事とプライベートのバランスで悩んだり、子どものことでやきもきしたり、とその夜の話題はつきませんでした。

暖炉のそばには椅子があり、話が途切れるとソファに座っている誰かが交代で、火の様子を見るよ」と言いながら、その椅子に座って薪をくべたり、タバコを吸ったりしていました。

皆でクリスマス恒例のクラッカーを鳴らししました。中には、ジョークが書いてある紙きれが入っていて、それらがあまりにもくだらないので、皆で見せ合って暖炉で燃やしました。それはまるで、室内にいながら、室外ともつながっているような



暖炉をつくるレンガは、色合いや焼き具合などが違うものをミックスさせることが多い

不思議な感覚でした。

ランプが二つしかなく、あとは暖炉の光だけがあるだけのリビング。皆がひとしきりしゃべり終わり、部屋に戻ったのはもう深夜の二時でした。最後まで

片づけを手伝った私は、心地よい疲れでもう一度部屋の中を見渡した時、「なぜ今夜はこんなに楽しかったんだろう」と考えました。そして、日本でのホームパーティーとの違いに思いをめぐらせると、明確な答えにたどり着きました。

それは暖炉があったからです。同じ炎を見ながら、みんなでそれを見て、その周りで語り合っ。人類の原始の姿に近い、この火のある空間が、私たちの親密度を急速に高めていってくれたのです。

暖炉は精神的な住まいの中心

そもそも暖炉は、室外でしか扱えなかった火を、うまく室内に取り入れた文明の最たる成功例と言ってよいでしょう。

人類史上における暖炉の歴史は、小屋の真ん中に穴を掘って作った炉に火を入れることから始まりました。やがて煙突ができたことにも

ないファイヤープレースは壁際に移動していきました。イギリスでは一七世紀の中ごろレンガを焼く技術が発達したため、それまで貴族が使用していた暖炉が、庶民の家でも作られるようになっていったのです。

「霧の都ロンドン」という言葉も、実はこの暖炉が深く関係しています。

少し前までイギリスでは、家を建てる時には必ずと言っていいくらい暖炉も作りました。しかも、居間の暖炉、寝室の暖炉と、各部屋に暖炉があつたばかりでなく、キッチンにもストーブキッチンと呼ばれる、暖炉のように火を利用した調理器具がありました。今もイギリスの住宅街を歩きますと、一つの家から三丁四本の煙突が出ているのはこんな理由からです。

暖炉で燃やすのは主に石炭でした。それが燃える時に、煙突から出る粉塵に空気中の水分がとりついて、慢性的な霧を生んだと言われています。「霧の都ロンドン」の由来はここににあります。ところが、霧が大量発生したことで、交通事故が多発したこともあり、今ではロンドンなどの都市部で、暖炉の使用は禁止されています。

その代わりに主流になったのが、お湯が通ったパイプを家中に張り巡らすセントラルヒーティングと呼ばれる暖房法です。イギリスの新しい物件に煙突がないことが多いのはそのためです。「霧の都」と呼ばれていても、現在ロンドン

ではほとんど霧が発生しなくなつたわけでは

それは、暖炉を規制された地域で、作り付けで作られた暖炉は無用の長物になつたかと言えば、そんなことはないのです。暖炉の窪みにドライフラワーなどを入れて飾り棚にしたり、暖炉の上に家族の写真を置いたり、ワインセラーにしたり…暖炉周りがインテリアのフォーカルポイントになっていることが多く、そういう意味では、火は燃えていなくても、いまだに暖炉が精神的な住まいの中心になつていると言えるでしょう。日本でも購入することはできますが、イギリ



本文にある、パース郊外のB&B。右端の男性のように、誰かが交代で火の番をしていた

スでもイミテーションの炎が出る電気式、ガス式の暖炉ストーブを使う人が増えました。私の自宅の暖炉も、そうだったイミテーションの炎がゆれる電気式ですが、その周りに丸太を配置するだけで、本物の暖炉の安らぎが得られます。たとえばイミテーションと言えども炎のあるリビングというのは、ゲストまで心が落ち着くから不思議です。

イギリスでは暖炉が再びブーム

ところで、イギリスの都市部や新しい家で暖房機能として暖炉が使われなくなったと書きましたが、田舎ではまだまだ健在です。

イギリスの大衆酒場、「パブ」では、暖炉のそばの席が特等席と言われています。暖炉のそばには常連さんがいつも座る椅子があり、知らずにそこに座ってハツの悪い思いをしたこともあります。

パブのガイドブックで、そのパブを表すマークに「リアルファイヤー」というのがあります。イミテーションではなく、うちには本物の暖炉がありますよ、ということですが、その店の売りになるほど暖炉文化は愛されているのです。

こんな話もあります。一七世紀から続く、「ロンドンウォルズのパブ」にいた時のことです。そこでは若くして亡くなった客の幽霊が出るという話でした。しかもその幽霊は、みんなの話に加わりたくて、常連が集まっている時にだけテーブルにくくそつです。常連たちは集まると、ビールを一つ余計に注文して、暖炉にいちばん近い席におき

ます。みんな彼の魂が暖炉に宿っていると思っているからで、いつでも彼が出てきやすいようにそうしているというのでした。炎にはそういう魂が宿っているかのような、神秘的な力もあるのではないのでしょうか。

イギリスで見聞きしたこんなエピソードがある人のことを思い出しました。

私の知り合いで自宅のリビングルームに囲炉裏を作った人がいます。しかも、焼き肉屋のテーブルのように天板の真ん中をくりぬいて、脚にはキヤスターまでつけ、どこにでも簡単に移動できるようにしたそうです。囲炉裏付きテーブルを作った理由を聞くと、「こうしておけば、自然に家族が集まってくるんだよ」と言います。

彼の家には多感な一〇代後半のお子さんが二人いましたが、茶髪ガングロ少女らが冬になると、囲炉裏の火を求めてリビングに集まってくるそうです。「突つて、ずっと動いているから飽きないんだよねえ」と友人。

家族みんなで一つの火を囲む……そのこと自体に何か大きな意味があるように思えてなりません。

実は、ここ数年、イギリスでは暖炉が再びブームを迎えています。イギリスという国は何かが廃れ始めると、必ずそれを守ろうとするムーブメ



ロンドンでは、1970年から暖炉使用の規制が始まった

ントが起る国です。ご存知のとおり経済も好景が続ぎ、人々の生活が豊かになつたからこそ、スロウライフが見直され始めたのです。

本物の火が使える地域では、暖炉を大切にしようという動きがあります。煙突掃除職人は一時期少なくなつてしまつたため現在は人手不足ですが、煙突掃除職人団体の働きかけで、その数も三年前の二〇〇人から三五〇人に増加したといふことです。

洋の東西を問わず、自然に人を集めてしまつた暖炉。暖炉があれば、明るさ、温かさ、そして、人とのつながりが密になる、それはどこの国も同じはずですよ。

CEL

井形 慶子(いがたけい)

作家。長崎県生まれ。大学在学中から出版社でインテリア雑誌の編集に携わる。その後、世界六〇ヶ国に流通する外国人向け情報誌「HERA GANA TIMES」を創刊。二八歳で出版社を立ち上げ、個人的な暮らしをテーマにした月刊情報誌「ミスター・パートナー」を発売する。同誌編集長。六〇回を超える渡英経験を通じて書き下ろした著書は多数。ベストセラーになった。古く豊かなイギリスの家。便利で美しい日本の家(現・新潮文庫)。イギリス式月収20万円の暮らし方(講談社)。近者は、少ないお金で夢がかなうイギリスの小さな家(大和書房)。初のフォトブック「イギリス式暮らしの知恵」(宝島社)が話題。

井形慶子ホームページ <http://www.mpartner.co.jp>